「子どもはみんな問題児。」を読んで

今井　奈津希

　この本の題名でもある「子どもはみんな問題児」というこの1フレーズを聞いて、またこの本を読んで、私は今まで子ども達に対しての保育や関わり方を改めて見直すきっかけとなった。

　今年度も年少の補助としてクラスに携わっているが、1学期当初に必ず思うことは去年と同様で一言で表すと子ども達との戦いであった。涙する子はもちろん自我が強い子、毎日のように「これは～だからいけません」と話しているのに同じことを繰り返す子…など。様々な性格の子がいるなかで私は「なんでこの子は～だろう」と決めつけてしまっていたり、言ってしまえば「良い子」、上にもっと上にと求めすぎてしまっていた。今までの私の子ども達への保育では、一人一人の個性や子どもらしさを無視し、潰してしまっていたのではないかと気付いた。「子どもはみんな問題児」それはあたりまえのことで、それが子どもらしいのではないかと思った。きっと自分も幼いころは、そうであったであろう。石頭になり考えるのではなく、もっと頭を柔らかくして考えて子ども達と関わりたいと思った。

　　子どもだけではなく、大人も、人々は様々な経験を通して日々成長していく。私自身も、今までに苦手なことや人間関係など様々なところで悪戦苦闘しながらも乗り越えてきた。今ではそういった壁にぶつかってしまったとき、どうすればいいのか考えることができるが、幼いころの私はどうしたらいいのか分からず、悩んでいたことを今でも覚えている。表情や言葉には出さないが「気付いてほしい」そう心の中で思っていた。そのときの自分の姿と、特にクラスにいる気になる姿の子ども達の姿が重なることがある。保育が終わり1日を振り返ると「あ、今日クラスのこの子とあまり会話など関わらなかったな」と思うことがある。自分自身のことで精いっぱいになり一人で焦り、子ども達の姿をよく見ず、関わらず1日が終わってしまうことが多々ある。この本の中に「自分なりにいい子になっていこうと悪戦苦闘している」「自分なりに悩んでいる」と書かれている。きっと、そういった様子の変化などを、私は見逃してしまっていると思った。目を合わせ一言でも言葉を掛ける、スキンシップを取るだけでも、その子の変化を見抜くことができるのではないか。もっと子どもの目線に立ち、気持ちを考えたい。幼稚園では子ども達の先生でもあり、安心してもらえるような安全地帯でいたいと強く思う。